法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第７１回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

「ふつう」を知った日

福井県・越前市武生南小学校・６年
川本（かわもと）　一翠（いすい）

「その人と家族とどっちが大事なの。」
　姉が祖母に強い口調で言った。
　よく聞いていなかったが、祖母が保護司をしていることについて話をしているらしかった。
　保護司は、保護観察というのを受けた方をサポートする仕事だ。良いことなのに、いやな言い方をしてい和感があった。
　祖母は、保護司に関わる色々な資料を姉の前に置いて部屋にもどった。自分で考えなさいというときの祖母だ。
　姉がパラパラとめくりだしたので、一しょに見た。姉は、おこったような顔をしていた。
「良いことなんじゃないの？」
と言うと、私にも食ってかかってきた。
「犯罪を犯した人と会うってことは、家族にもき険があるってこと。簡単にいいっていうのは、家族を大事にしていないってことだと思う。」
　何も言えなかった。急に、姉の方が正しいように思った。
　姉にかくれて祖母の所に行った。
「ばぁば、やっぱり少しこわい気がしてきた。」
祖母は、少し困った顔をして、でも、しっかりと目を見て私に言った。
「一翠は、いややなあって思うことない？目のこととかで、困ったことない？」
　私は目がとても悪く、特別な眼鏡をかけているし、そのことでいやな思いをしたことがある。眼鏡を無理矢理外すように言われて、レンズが取れ

てしまったこともある。その日は、全く周りが見えなくて、ずっと困ったし、ただずっと泣くことしかできなかった。単純な弱い者いじめではないけれど、他の人が分からないことが、本人にはとても大切で、困ることがある。当たり前だと思っている正しさが、正しいとは限らないこともある。知らない間に相手にとって悪いことをしているということもある。

私は、困ったとき、祖母を含め、色々な人に助けてもらってきた。目が悪いと分かったときは、家族中が心配した。複数の病院に行った。小さかったのでよく覚えていないけれど、私は、初めて眼鏡をかけて保育園に行った日、体が固まって、声も出なくなってしまった。母は、私の前では決してなみだを見せなかったが、何よりつらかったと言っていた。でも、保育園の先生方が折り紙で眼鏡を作ってくださり、友達の中でも、「ふつう」に過ごせるようにしてくださった。ご近所の方も、同じような眼鏡のお姉さんがいて、経験を教えてくださった。学校でも同じクラスに眼鏡の友達がいた。色々なサポートがあって、今の私がある。「眼鏡の私」が、「ふつうの私」でいられるのは、私だけでは無理だった。祖母は私の話を聞いて、

「そういうことなんだよ。」

と言った。

祖母がたん当させていただいている方は、祖父と同じくらいの年の方もいるらしい。それでも、時間通りに来ることができなかったり連絡を忘れてしまったりしてしまう。それでも、祖母は、毎回約束して、話を聞く。

「「ふつう」ってとっても大切なんだよ。」

とも言った。たん当している方は、よくわからないまま罪を犯してしまった。規則正しく生活をして、仕事をして、家族と暮らす。この「ふつう」を取りもどしていただくための仕事だと思っていると言った。たん当の方のご両親は祖母がうかがったとき、両手をにぎって、「お願いします。お願いします。」と何回も泣きながらおっしゃったそうだ。祖父と同じような年れいのご両親だから、相当年れいが上の方なのだけれど、大切な家族のことを思って、他人である祖母に心からの言葉を伝えてきたそうだ。祖母はいつも言う。

「罪を犯してしまうということは、やはり社会がどこかおかしいということなんだよ。」

正直、罪を犯す人は「悪」としか考えていなかった。もし、自分の大切

な人が助けを必要としていたら、全力で助けようと思うし、現に、私も、私のことを大切にしてくださる方のサポートのおかげで、今がある。それはサポートを必要とする方をはあくし、必要な援助をする仕組みがあることが必要だ。

姉が、祖母の部屋に入ってきた。

「悪いことをするために生まれてきた人はいないってこと分かった。ごめん。」

と、姉が祖母に言った。祖母は、

「考えてくれてありがとう。」

とだけ言った。

大切なのは、こういうことなんだと思った。社会全体が関心を持つこと、考えること。全員が不満の無い社会は、正直難しいと思うけれど、それでも、少しでも多くの方が、祖母のいう「ふつう」を感じることができる社会、それが、祖母が保護司をしている希望なんだと思う。私も姉も社会の一員だ。だから、考えることをやめずにいようと決めた。